

四 条 金 吾 許 御 文

弘安三年一二月一六日 五九歳

白小袖こそで一つ・綿十両たし慥かに給おわび候おわひ畢おわんぬ。

歳もかたぶき候。又処は山中の風はげしく、庵室はかごの目の如し。うちしく物は草の葉、きたる物はかみぎぬ、身のひゆる事は石の如し。食物は氷の如くに候へば、此の御小袖給やがび候やがひて頓やがて身をあたゝまらんとをもへども、明年の一日とかゝれて候へば、迦葉尊者かしょうそんじやの鷄足山けいそくせんにこもりて、慈尊じそんの出世しゅつせ五十六億七千万歳ごじゅうろくおくしちせんをまたるゝもかくやひさしかるらん。これはさてをき候きひぬ。しめぢしめぢの四郎しやうらうがかたり申し候御前の御法門ごほうもんの事、うけ給うけはり候うけこそよにすゞしく覚え候へ。此の御引出物ごひきだすものに大事だいじの法門ほうもん一つかき付けてまいらせ候。

八幡大菩薩はちまんたいぼさつをば世間の智者・愚者、大体は阿弥陀仏あみだぶつの化身けしんと申し候ぞ。其れもゆへなきにあらず。中古の義に或は八幡の御託宣みたくせんとて阿弥陀仏と申しける事少々候。此はをのをの心の念仏者ねんぶつものにて候故に、あかき石を金と思ひ、くひぜをうさぎと見るが如し。其れ実には釈迦仏しやくかぶつにておはしまし候ぞ。其の故は大隅の国に石体の銘と申す事あり。一つの石われて二つになる。一つの石には八幡と申す二字あり。一つの石の銘には「昔靈鷲山りょうじゆせんに於て妙法華経を説き、今正宮の中に在って大菩薩と示現す」云云。是釈迦仏と申す第一の証文なり。此よりもことにまさしき事候。此の八幡大菩薩は日本国・人王第十四代仲哀天皇ちゆうあいは父なり。第十五代神功皇后じんくうは母なり。第十六代応神天皇おうじんは今の八幡大菩薩是なり。父の仲哀天皇は天照太神の仰せにて、新羅国しらぎこくを責めんが為に渡り給ひしが、新羅の大王に調伏せられ給ひて、仲哀天皇ははかたにて崩御ありしかば、きさきの神功皇后は此の太子を御懐妊ありながらわたらせ給ひしが、王の敵をうたんとて数万騎せうばんのせいをあい具して新羅国へ渡り給ひしに、浪の上・船の内にて王子御誕生の氣いでき見え給ふ。其の時神功皇后ははらの内の王子にかたり給ふ。汝は王子か女子か。王子ならばたしかに聞き給へ。我は君の父仲哀天皇の敵を打たんが為に新羅国へ渡るなり。我が身は女の身なれば汝を大将とたのむべし。君、日本国の主となり給ふべきならば、今度生まれ給はずして軍の間、腹の内にて数万騎の大將となりて、父の敵を打たせ給へ。是を用ゐ給はずして、只今生まれ給ふほどならば、海へ入れ奉らんずるなり。我を恨みに思ひ給ふなと有りければ、王子、本の如く胎内にをさまり給ひけり。其の時石のをびを以て胎をひやし、新羅国へ渡り給ひて新羅国を打ちしたがへて、還ぶぜんつて豊前ぶぜんの国うさの宮きのえとらにつき給ひ、こゝにて王子誕生あり。懐胎の後、三年六月三日と申す甲寅みづのえさるの年四月八日に生まれさせ給ふ。是を応神天皇と号し奉る。御年八十と申す壬申みづのえさるの年二月十五日にかくれさせ給ふ。男山の主、我が朝の守護神、正体めづらしからずして靈験新たにおはします。今の八幡大菩薩是なり。

又釈迦如来は住劫第九の滅、人壽百歳の時、淨飯王じやうほんのうを父とし摩耶夫人まやぶにんを母として、中天竺伽毘羅衛国ちゆうてんじくかびらえこくらんに園らんと申す処にて甲寅の年四月八日に生まれさせ給ひぬ。八

十年を経て、東天竺俱尸那城くしなじょうぼつだいが跋提河みずのえさるの辺にて、二月十五日壬申みづのえさるにかくれさせ給ひぬ。今の八幡大菩薩も又是くの如し。月氏と日本と父母はかわれども、四月八日と甲寅と二月十五日と壬申とはかわる事なし。仏滅度の後二千二百三十余年が間、月氏・漢土・日本・一閻浮提いちえんぶだいの内にしょうにん聖人賢人と生まるゝ人をば、皆釈迦如来の化身とこそ申せども、かゝる不思議は未だ見聞せず。

かゝる不思議の候上、八幡大菩薩の御誓ひは月氏にては法華經を説いてしょうじきしゃほうべん正直捨方便となのらせ給ひ、日本国にしては正直の頂にやどらんと誓ひ給ふ。而るに去ぬる十一月十四日の子ねの時に、御宝殿をやいて天にのぼらせ給ひぬる故をかながへ候に、此の神は正直の人の頂にやどらんと誓へるに、正直の人の頂の候はねば居処なき故に、すみか栖すなくして天にのぼり給ひけるなり。

日本国の第一の不思議には、釈迦如来の国に生まれて此の仏をすてゝ一切衆生皆一同に阿弥陀仏につけり。有縁の釈迦をばすて奉り、無縁の阿弥陀仏をあをぎたてまつりぬ。其の上親父しんぶ釈迦仏の入滅の日をば阿弥陀仏につけ、又誕生の日をば薬師ほんちすいじやくになしぬ。八幡大菩薩をば崇むるやうなれども、又本地を阿弥陀仏になしぬ。本地垂迹ほんちすいじやくを捨つる上に、此の事を申す人をばかたきとする故に、力及ばせ給はずして此の神は天にのぼり給ひぬるか。但し月は影を水にうかぶる、濁れる水には栖むことなし。木の上草の葉なれども澄める露には移る事なれば、かならず国主ならずとも正直の人のかうべにはやどり給ふなるべし。然れば百王の頂にやどらんと誓ひ給ひしかども、人王八十一代安徳天皇・二代隱岐法皇・三代阿波・四代佐渡・五代東一条等の五人の国王の頂にはすみ給はず。諂曲てんこくの人の頂なる故なり。頼朝と義時とは臣下なれども其の頂にはやどり給ふ。正直なる故か。

此を以て思ふに、法華經の人々は正直の法につき給ふ故に釈迦仏猶是をまぼり給ふ守。況んや垂迹すいじやくの八幡大菩薩争いかでか是をまぼり給はざるべき。浄き水なれども濁りぬれば月やどる事なし。糞水ふんすいなれどもすめば影を惜しみ給はず。濁水は清けれども月やどらず。糞水はきたなれどもすめば影ををしまず。濁水は智者・学匠の持戒なるが法華經に背くが如し。糞水は愚人の無戒なるが、貪欲とんよくふかく瞋恚強盛しんになれども、法華經計りを無二無三に信じまいらせて有るが如し。涅槃經と申す經には、法華經の得道の者を列ねて候にこうろうぶくかつ蜚ひ蜚ひ蠅しやう蠅しやうと申して糞虫を挙げさせ給ふ。竜樹菩薩りゅうじゆぼさつは法華經の不思議を書き給ふに、昆虫こんちゆうと申して糞虫を仏になす等云云。又涅槃經に法華經にして仏になるまじき人をあげられて候には「一闍提いっせんたいの人の阿羅漢あらかんの如く大菩薩の如き」等云云。此等は、濁水は浄けれども月の影を移す事なしと見えて候。されば八幡大菩薩は不正直をにくみて天にのぼり給ふとも、法華經の行者を見ては争でか其の影をばをしみ給ふべき。我が一門は深く此の心を信ぜさせ給ふべし。八幡大菩薩は此にわたらせ給ふなり。疑ひ給ふ事なかれ、疑ひ給ふ事なかれ。恐々謹言。

十二月十六日

日蓮花押

四条金吾殿女房御返事